『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』10（2007）：291－313

アイヌロ承文芸テキスト集８
白沢ナベロ述　ユカライルパイェ：シヌタッカ人、石狩人と戦う

採録・訳・註　中川裕

このシリーズはこれまで千歳市蘭越出身の白沢ナベ氏（1905-93：戸籍上は1906-）による散文説話と神謡のテキストを紹介してきたが、今回は荻原眞子先生の退職記念号ということであるので、今まで取り上げてこなかった英雄叙事詩のテキストを紹介することにする。1988年8月29日に白沢氏の自宅で中川が録音したもので、整理番号はN8808291YRである。

あらすじ

私はシヌタッカ人である。クマやシカをとり、魚をとってひとりで暮らしていた。ある日奥山の狩場に行って下のほうを見ると、どこかの長者がチチケウナという化け物グマに追いかけられて、私のほうめがけて逃げてくる。そこで、私は棍棒を作って木の陰でまちぶせ、長者が通り過ぎたところでクマの額を殴りつけた。クマは長者を追いかけ続けて疲れきっていたらしく、一撃で谷底に転がり落ち、そのまま死んだ様子であった。

すると、戻ってきた長者は私に礼を言うどころか、

「どこまで私を追いかけたら死ぬかを見たくて、わざと追いかけさせていたのに、なんだってお前はクマを殺したんだ」と、私に毒づいた。そして私に、「お前がどれほどの度胸があるのか、度胸比べをしよう」といって、キモムッカラペという太刀を抜いて切りかかってきた。上からの太刀は羽ばたくごとく、下からの太刀は跳ねるがごとく、私が太刀を抜く暇もなく切りかかってくるので、私はただ逃げ回るばかり。木の枝に飛びつくとその枝ごと切られ、別の枝に飛びつくとまたその枝ごと切られる。そのうちにやっと刀を抜くことができたので、お返しに同じように木の枝を跳んで逃げ回るのを切りつける。

お互いに刀が相手に触れることもなく、そうやって切りつけあっていたが、そのうちに男は「木原に立つヤチダモに背を向けて立って、お互いの胸を切り裂き合おう」という。その言葉に従ってヤチダモを背に立つと、私の胸を上から下から切り裂き、はらわたをずたずたにした。そこで私も木を背にして相手を立たせ、その胸を上から下から切り裂いた。するとその男は、「お前がどこの村の者かは知らないが、度胸のある者であることはわかった。この出会いは戯れの出会いなので、次に本当の出会いをするからな」と言って、去ってしまった。

私は家に戻って自分の傷を看病したが、すぐに元の体に回復することができた。風のうわさ

で例の男は私の従兄弟の石狩人であり、私に切り裂かれた傷が治らずに、夏６年冬６年の間寝込んでいたということを聞いた。

そのうちに傷も癒え、以前のように狩をしたり魚を捕ったりして暮らしていると、ある日のこと、外で咳払いの声がする。戸を開けてみると会ったこともない女性が立っていた。中に入れると、大変な美女であるばかりでなく、頭の上を憑き神が飛び回り、巫術にも大層秀でた女性であることがわかった。その女性は、自分が私のいいなづけであるオタスッ媛であり、両親から私の世話をするように言われて来たのだという。

そこで結婚の儀式をして夫婦となったのだが、彼女は大変な働き者で、縫い物であれ畑仕事であれ人一倍仕事ができる。そのうちに子どもが大勢生まれ、大きくなった息子には私が男の仕事を教え、娘には妻が女性の仕事を教えた。例の石狩人のことはすっかり忘れていて、こちらから会いに行くことも、向こうからたずねてくることもなかった。

こちらで酒を作るとオタスッの妻の親せきを招き、オタスッで酒を作るとこちらが招かれる。息子たちは成長して、私同様肥えたシカやクマをたくさん捕ってくる。こうして、何を食べたいとも欲しいとも思わないほど幸せに暮らしていた。そして、「これこれこういうわけでチチケウナに追われていた男を助けたおかげで戦いになったのだから、狩に行ってなにか不審なことがあっても、決して助けに行くのではないよ」と、子どもたちに教え諭しながら、天寿をまっとうしたのだ。

解説

この物語は白沢氏の説明によれば yukar irupaye、すなわち「ユカラの散文語り」というものである。女は男のように（節をつけて）yukar を語るものではないということは、各地で報告があるが、白沢氏によると千歳でもまた同様のことが言われていたということで、私は同氏からは節付きで yukar を採録したことはない。この散文語りの yukar を白沢氏は yukar irupaye と呼んでいたが、また「uepeker に語る」という言い方もしていた。本稿の物語は、内容的・表現的にいわゆる uepeker「散文説話」とは一線を画すものだが、それでも散文で語るということ以外に uepeker 的な特徴を多分に有している。その点を中心に以下で解説してみたい。

本編の主人公は、Sinutapka un kur（以下、シヌタプカ人）であり、これは典型的な yukar の（「アイヌ英雄叙事詩の」ではない）主人公である。本編の前半はこれもまた yukar の主要な登場人物のひとりである、pon Iskar un kur「小石狩人。以下、石狩人」との対決が話の中心となっている。親がいないことは通常の yukar と共通であるが、養い兄・姉などの存在も

語られず、すでに成人しているようである。狩の最中に、悪熊（cicikewna）に追われていた男を助けようとするが、それが逆に相手の怒りを導き、決闘になる。この戦いの場面はまさに yukar 的な表現と展開の連続であり、明らかに uepeker とは別物であることを示す部分である。この戦いは痛み分けに終わってそのまま分かれ、その相手が自分の従兄弟である石狩人であることを後に知ることになるのだが、石狩人との因縁話はここで終わりであり、話は後半に移る。

後半は Otasut un mat（以下、オタスッ媛：後のほうでは Otasam un mat と言っている）が、自分のいいなづけということでやってきて、そのまま夫婦となるのだが、その後何かオタスッ媛をめぐって事件が展開するのかと思いきや、何も起こらない。ただ幸せな後半生が描かれるだけである。石狩人とも再会を約したはずなのであるが、a=oyra wa a=hotanukar ka somo ki. i=hotanukar ka somo ki.「私は忘れていて訪ねもしなかった。向こうも訪ねて来もしなかった」という有様で、前半と後半は話がまったくつながらない。そして、「山で何か不審なことがあっても、決して助けに行くのではないよ」という、倫理的にはいささかどうかと思われるような教訓を子孫に垂れて、天寿をまっとうするのである。

一般的に知られている yukar の多くは、いくつかの戦闘場面の連続の後、いったんそれが終了したところで、そこから何らかの脈絡をつなげながら、次の戦いの話が再び展開していくというスタイルをとる。それがこの話ではひとつの戦闘がイベントとして行われた後、そこから次の展開につながらないまま、主人公の幸せな後半生の描写に後半部を費やしている。このように話の半分方を幸せな後世を描くことに費やすのは uepeker の構造だと言ってよい。筆者はこれを散文で yukar を語ることによって発展した形式ではないかと見ている。すなわち、男性は節つき、女性は節無しで語るのが千歳地方の伝統だとするならば、この話の少なくとも後半部は、女性の伝承の中で発達した形式であり、その部分を含めて節つきの形式で語られることは最初からなかったのではないか、という予想である。

この点について、白沢氏からもう少し詳しく聞き取りをすべきだったと思うが、当時としてはそこまでに思い至らなかった。ただ、1989 年 10 月 31 日の聞き取りにおいて「男の irupaye ときたら、こんなことも uepeker と違って、えらそうなこということもあるよ」というような言い方で、男性の irupaye と女性の irupaye の間には文体的な差が存在しているということを示唆する発言もあり、女性が散文で語る中で形作られた、男性とは異なる yukar の伝承形態というものの可能性は考えてみる必要があると思う。

もとより、これはまだ仮説の段階であり、実証可能かどうかはこれからの問題だが、筆者が

かつて原文対訳した沙流郡平取町の木村きみ氏による「シヌタㇷ゚カウンクルの妹の自序」[1]と題したテキストは、女性を主人公とした数少ない yukar であるが、戦闘場面と呼べるようなものがほとんど無く、登場人物が Sinutapka un mat「シヌタㇷ゚カ媛」や Iyoci un kur 「余市人」などの yukar のそれであることを除けば、展開はほとんど uepeker の趣である。木村きみ氏はこれをやはり yukanrupaye<yukar rupaye と呼んでいた。筆者はこれを単にもともと節つきで語られていた yukar を散文で語ったものと解していたが、男性が節をつけて語るには不向きな内容であり、女性が散文で yukar を語る中で形成されたものではなかろうかと、現在では考えている。

以上のこととは別に、前半部の内容にも注目すべき点がある。この話はシヌタㇷ゚カ人と石狩人のただ一度きりの出会いと戦いを描いたものであるが、その中でこのふたりは irwak だということになっている。irwak とは自分の兄弟と同じ世代の親族を指すことばだが、白沢氏はこの話の解説ではっきり「いとこ」だと言っている。このようにシヌタㇷ゚カ人と石狩人とがいとこ同士だとする yukar は、この話以外に各地で記録されている。そして、そうでありながら戦いあうという点でも、多くの話が共通している。このシヌタㇷ゚カ人と石狩人の争いというモチーフは、多くの yukar 研究で等閑視されているものであり、わずかに榎森進氏がそのことを取り上げているが、それも yaunkur 対 repunkur の戦いのきっかけという形でしか扱われていない[2]。しかし、本編はまさにそれが話の中心であり、そして、シヌタㇷ゚カ人も石狩人も、アイヌ英雄叙事詩全体ではなく、日高西部・胆振、そして千歳という地域的に限定された yukar という伝承中の登場人物であるから、このモチーフというのは、アイヌ英雄叙事詩全体ではなく yukar のみに関わってくる事項なのである。すなわち、yukar としては非常に短いこの 1 編が、英雄叙事詩の形成過程に関わる問題を孕んでいるということになるが、ここではそれを指摘するに留め、それについての議論は別項にゆずることにしたい。

---

1 木村きみ口述・中川裕訳註『英雄の物語』アイヌ無形文化伝承保存会（1982：5-33）

2 榎森進（1979）「ユーカラの歴史的背景に関する一考察」『史潮』（新 5 号）では、それまでの英雄叙事詩のテキストを分析した上で、「朱の輪」のようにシヌタㇷ゚カ人と石狩人の戦いが描かれるケースについて、「同族間の矛盾が発端になり、それにレプンクルが介在することにより、最終的にレプンクルとの戦いへと発展していく場合」に分類して説明している。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、=（イコール）は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_（アンダーバー）を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w_a → an ma。h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。...とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。その際、*re ... などのように*を添えたものは、単語が言いさしになって、不完全な形で終わっていることを示す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それを示しておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合にのみ示してある。

註は各ページごとに脚註の形で示した。脚註等における N8808291.FN のような記号は、私の採録した資料の整理番号である。N(白沢ナベ）93（1993 年）06（6 月）21（21 日に録音した）1（本目のテープに収録されている）ことを示す.（ピリオド)以下の記号は、YR（ユカラ)、FN（フィールドノート）等を示す。

本文

Sinutapka un kur a=ne wa	私はシヌタㇷ゚カ人で
an=an pe ne hike	あったが
otu kes pa ta ore kes pa ta	二年も、三年も（長い間）
ekimne=an kor	山へ行くと
yuk cikoykip kamuy cikoykip	シカや、クマの
tek sak pe ne cikir sak pe ne[3]	手を取り、足を除き
a=eawnarura <ra> wa,	持ち帰って来て、
sinen a=ne kusu <su> a=e kasma wa	私は独り者なので、食べ余した分は
cise or_ ta ka orasnacitke	家の中にもぶらさげ、
soy ta ka orasnacitke p ne korka,	外にもぶらさげていたが
<ka> somo ekimne=an no an=an y_akka	山へ行かずにいるのも
a=emismu kusu ekimne patek arpa=an.	退屈なので山にばかり行っていた。
yuk ka a=rayke kamuy ka a=rayke.	シカも捕り、クマも捕った。
cepkoyki=an kor	魚捕りをすると、
a=epetetne[4] p ne kusu	向こうから寄ってくるように捕れるので
cep ne yakka poronno	魚もたくさん
pirka cep a=rayke wa <wa>	いい魚を捕って
a=satsatu wa	干して
kamuy kam ka yuk kam ka	クマの肉もシカの肉も
cep kam ka poronno a=satke wa,	魚の肉もたくさん干して
piye usike osumtapes kor	脂の乗ったところをぶら下げて
oka=an wa an=an	暮らしていた。
nispa a=ne wa an=an ruwe ne awa <wa>	私は（そういう）長者であったが
sineanpata ekimne=an kusu arpa=an h_ine	ある年、山に狩に行って
toop ... toop kim ta	ずっと奥山の

---

3 tek sak pe ne cikir sak pe ne：この表現でどのようなことを表そうとしていたのかについては、聞きそびれた。後の「食べ余す」という表現から考えて、解体した手足の部分は山に置いて、頭と胴体だけを家に下ろしてくるということかと思われる。

4 a=epetetne：「a=epetetne っていうのは、魚でもこうとってくれっていって寄ってくるみたいな案配で、よくとれることという話だ」（N8808291.FN）

iwor or_ ta arpa=an h_ine <ne>	狩場に行って
iwor_ *tura ... iwor_ turasi hemesu=an.	狩場に沿って登った。
nupuri turasi hemesu=an h_ine	山を登っていって
orowa inkar=an.	そして、ながめた。
nupuri turasi ...	山を…
nupuri hontom pakno hemesu=an w_a	山の中腹まで登って
herasi wa[5] inkar=an akusu <su>	下のほうを見ると
neyun nispa ne nankor y_a,	どこの長者であろうか
kamuy or wa kese a=anpa[6] wa <wa>	クマに追いかけられて
parkan[7] hese kor hoyupu wa	ハアハア言いながら走って
ek siri a=nukar wa,	来る様子が見えて
i=tom unno arki wa kusu,	私のほうへまっすぐやって来るので
kanni a=kar hine	私は棍棒を作って
newaan kamuy a=kik wa	そのクマを殴って
a=rayke kuni a=ramu kusu	やっつけてやろうと思ったので
kanni[8] a=kar.	棍棒を作った。
esisuye humi pirka kanni a=kar hine,	振り具合のよい棍棒を作って
a=kor wa ruwe ni sempir a=osiraye hine	手に持って太い木の陰に身をひそめ
as=an[9] w_a inkar=an w_a an=an akusu,	じっとして見ていると
kamuy anakne tane sinki wa	クマはもはや疲れて
koysum tak ekupa kane an kamuy ne hine	泡の固まりをくわえている様子で
orowano <no> ne nispa ous ous kane wa	そして、例の長者に追いすがりながら
ukesanpa[10] wa arki hine	追いかけてやってきて

---

5 herasi wa：白沢氏は通常 herasi を副詞としてそれだけで「下へ」の意味で使っている。ここだけ接続助詞の wa を後置させている理由は不明。

6 kamuy or wa kese a=anpa：or wa は「～から」を表す表現だが、a=と組み合わせられると、受身文における動作主を意味し、「～に」と訳されることになる。

7 parkan：語義不明。

8 kanni：「棍棒」と訳したが、戦闘用の棍棒である sutu とは別物で、杖のような棒も指す。

9 as=an：as は普通、「立つ、立っている」と訳すが、立ち上がる動作を指すのではなく、直立して静止した状態にある（なる）ことを表す。だから「立ち止まる」という訳があてはまる場合もある。ここでも「立っている」ことが重要なのではなく、「動かないでじっとしている」ことが as で表されているのだと考えられる。

i=sam kus wa	私のそばを通って
nispa kamuy[11] i=akkari wa	長者殿が通り過ぎたところで、
os ek kamiasi <si>	後から来た化け物の
noyporoho a=kik hine <ne>	額を殴ると
a=earkik korka	一撃だったのだが
tane sinki ka ki p ne kusu,	すでに疲れていたために
keworsak kotom an hine <ne>	力が無くなっていたようで
nani karkarse wa arpa ayne,	すぐに転がって行って
pinay asam osmatek wa	谷の底に落っこちて
oar isam ruwe ne *aku ...	姿を消してしまうと…
pinay asam osma yakka,	谷底に落ちていったが
tane ray ruwe ne kuni a=ramu kor	もはや死んだであろうと思って
as=an w_a an=an akusu,	立っていると
nea nispa i=kohosipi hine	例の長者は私のほうに戻ってきて
i=kosakayokar hawe ene an h_i	私にこう言って毒づいた。
"neun pakno i=kesanpa wa ray h_i	「どこまで私を追いかけたら死ぬか
a=nukar_ rusuy kusu	見たかったので
okamkinno a=sikesanpare wa	わざと自分を追いかけさせて
i=kesanpa wa ek wen kamuy,	追いかけてきた悪クマを
nep e=kar kusu e=kik wa	何だってお前は殴って
e=rayke ruwe ne ya?"	殺したんだ？」
sekor hawean kor i=kohosipi wa	と、言いながら戻ってきて
orowano <no> i=kosakayokar ayne <ne>	私に毒づいたあげく
orowa	そして
"ene pakno ... neun pakno rametokkor pe	「お前がどれほどの勇者で

---

10 ukesanpa : u-kesanpa と分解できるので、u-を「互いに」ととると、「互いに追いかけあう」という意味になりそうだが、ここではクマが若者を一方的に追いかけているのであり、その訳では合わない。この u-は参与者が複数であることを示す u-であり、「追いつ追われつ」というのが近いかもしれない。

11 nispa kamuy : nispa「長者」と kamuy「クマ」という意味ではない。ここでは、nispa に対する美称として kamuy がつけられていると見るべきである。このように kamuy という言葉は明らかに人間を指している場合でも用いられるので要注意である。

e=ne wa e=iki hi ne ya,	あるというのでこうしたのか
a=kor_ rametok *e=eputt ...	私の度胸に
e=epetturasi kuni e=ramu kusu	かなうとでも思って
e=iki hi ne ya.	したことであるのか？
urametokwante=an w_a inkar=an ro."	度胸比べをしてみようじゃないか」
sekor hawean kor	と言いながら
mut emusi	佩いている太刀
kimomutkarpe[12] sikoetaye hine,	キモムッカァペという太刀を引き抜いて
orowano i=tamkocupu	私に切りかかってきた。
orowano asinuma ka okkayo ...	そこで私も
okkayo moymoyke pakno moymoyke kur	一人前の男の動きぐらいはできる者で
a=ne a korka a=i=tamkocupu wa	あったが、切りつけられて
rik kus tam kur rapse nuy ne[13]	上からの太刀は舞い降りる炎のごとく
ra kus tam kur terke nuy ne	下からの太刀は跳ね上がる炎のごとく
a=i=eonuytapukte[14] kane	私を炎でつつむ
semkoraci a=i=kar wa	かのようにして
emus etaye ka a=eaykap no	私が太刀を抜くこともできぬように
a=i=kar pe ne kusu,	してくるので
orowano yaykirare=an.	そこで私は逃げ回り
kira takup a=ki ayne <ne>	ただ逃げるばかりで
eytasa a=i=wenruyre kor	たいそう劣勢に立たされながら
sirkorkamuy rik un niteke ranke niteke,	立ち木の上の枝、下の枝
ranke niteke ni tuypok a=kotukkotuk	下の枝の、枝の下にとびつきとびつき
ni tuyka a=kotukkotuk.	枝の上にとびつきとびつき
rik un niteke ni tuypoki a=kotukkotuk.	上の枝の、枝の下にとびつきとびつき
ni tuykasi a=kotukkotuk[15].	枝の上にとびつきとびつき

---

12 kimomutkarpe：他の話では kimomutpe とも言っている。makiri「小刀」や tasiro「山刀」とは別に山にさしていく刀だということだが、yukar の中だけに出てくるもののようである。

13 rik kus tamkur rapse nuy ne：rik「高所」kus「～を通る」tam「刀」kur「影」。rapse は鳥が舞い降りる時に使われる言葉。nuy「炎」ne「～となって」

14 eonuytapukte：韻文中には eo~ta(kur)pukte で、「そこに～を湧き上がらせる」という表現が随所に出てくる。nuy は「炎」。

yaykirare takup a=ki ayne <ne>	逃げ回ってばかりいるうちに
inehuypaki ta a=mut emusi	そのうちに、佩いている太刀を
a=etaye easkay wa kusu a=sikoetaye.	抜くことができたので、引き抜き
a=mut emusi a=sikoetaye wa	佩いている太刀を引き抜いて
orowano a=tamkocupu	そして切りかかった。
ene i=kar h_i ne kusu	自分もそんなふうにされたのだから
terke kuni hopuni kuni	相手が跳ねようと飛ぼうと
hopuni etoko terke etoko <ko>	飛ぶ先、跳ねる先に
a=tamkarire sem koraci	太刀を先回りさせるがごとく
a=onuytapukte kane	炎を吹き上げながら
rik kus tam kur rapse nuy ne	上からの太刀は舞い降りる炎のごとく
ra kus tam kur terke nuy ne	下からの太刀は跳ね上がる炎のごとく
a=eonuytapukte kane ki akusu	炎を吹き上げながら切りつけると
orowano yaykirare ...	すると、逃げ回り
yaykirare takup ki.	逃げ回ってばかりいる。
iki=an h_i koraci	私のしたのと同じように
sirkorkamuy rikun tekehe ranke tekehe	大樹の上の枝、下の枝
ni tuypoki kotukkotuk	枝の下にとびつきとびつき
ni tuykasi kotukkotuk	枝の上にとびつきとびつき
kane iki wa yaykirare,	して、逃げ回り
orowano terke poka hopuni poka	跳ねるばかりも、飛ぶばかりも
eaykapte no a=kar ayne <ne>	できないようにしているうちに
inehuypaki ta suy	そのうちにまた
i=kotam'etaye easkay wa	私に向かって太刀を抜くことができ
orano i=tamkocupu.	私に切りかかってきた。
utaspa pakno utamkocupu=an ruwe ne korka,	互いに切りあっていたが
tameok[16] humi ka isam ...	相手に刀が触れる様子もない。

---

15 ranke niteke～a=kotukkotuk：この4行は木の枝に飛びつくと、その枝ごとばっさり切られるので、次々と別の枝に飛び移るという情景を描写したものである。

16 tameok：tam「刀」e-「～でもって」ok「ひっかかる」。刀が体に食い込むことを言うと思われる。

tameok=an humi ka isam no	私にも刀が触れる様子もなく
orowano ukoyki=an ayne <ne>,	戦い続けていたが、
tameok humi ka isam	相手にも刀が触れる様子もない。
tameok=an ka somo ki p ne kusu <su>	私にも刀が触れる様子もないので
konto i=aste wa	そこで私を押し止めて
"kenas so ka ta tukno pinni	「木原に立つ立派なヤチダモ
turano e=as wa	とともにお前は立って
ekopas e=as wa ne yakne <ne>,	よりかかって立ったならば
e=penramuhu a=sirkootke	お前の胸をグサッと突いて
a=senrototo <to>	切り裂いて
herikasi herasi ki kus ne na. as."	上から下からそうしてやるぞ。立て！」
sekor kane hawean w_a kusu <su>,	と言うので
ni ekopas as=an akusu	木に寄りかかって立つと
orowano <no> i=senrototo.	私を切り裂いた。
a=penramu otke wa	私の胸を突いて
senrototo wa ranke kane <ne>,	下へと切り下ろし
senrototo wa rikinka kane	上へと切り上げ
iki ayne <ne>	しているうちに
a=ossike o p yaske h_ine	はらわたがずたずたになり
a=sitomkote kane an=an.	体からぶらさがっている有様だ。
orowa as=an hine	それでも私は立ったまま
itak=an hawe ene an h_i	このように言った。
"ene i=kar h_i ne kusu	「私にこんなことをしたのだから
neno a=e=kar kus ne na.	お前にも同じことをしてやるぞ。
kenas so ka ta	木原に立つ
tukno[17] pinni ekopas as."	立派なヤチダモに寄りかかって立て！」
sekor itak=an akusu <su>,	と、言うと
ne pinni ekopas as wa kusu	そのヤチダモに寄りかかって立ったので
penramuhu a=sirkootke a=senrototo	胸を突き刺して、切り裂いた。

---

17 tukno：tuk は植物が「成長する」。-no は程度が十分であることを表す接尾辞。

a=ranke ka ki a=oriketa[18] ka ki kor	刀を下におろし、上にあげ
a=koyki ayne, a=koyki ayne	苦しめ抜いていると
orowa nea kamuyasi[19]	そのうちにその化け物野郎が
ene itak h_i ene an h_i <ni>	こう言った。
"nep ... "	「何…」
ene itak h_i ene an h_i	こう言った。
"ne kotan kor pe e=ne wa	「お前がどこの村の者で
ene <ne> rametokkor pe e=ne siri	こんなに度胸のあるもので
ene an h_i ne korka,	あろうとも
tane unukar anakne	この出会いは
sunke unukar	嘘の出会い、
sinot unukar_ ne ruwe ne kusu	戯れの出会いであるから
kanna unukar anakne sonno unukar	次に会ったときが本当の出会い
sino unukar=an[20] kus ne kusu <su>,	真の出会いであるから
hosipi=an kus ne na."	私は戻ることにするぞ」
sekor hawean kor hosipi wa oar isam.	そう言うと、帰って行ってしまった。
orowano <no> a=uni ta hosipi=an hine	それから私は自分の家に戻った
orowano a=piri kesehe a=piri pakehe	すると自分の傷の上の端、下の端が
su tattatce ekannayukar[21].	鍋が煮立ったようになった。
kasre usi cima kutatke[22] wa paye.	傷の浅いところはかさぶたが覆っていく。
orowano yaykopirkarkar=an ayne <ne>,	そして自分で傷の手当をしているうちに

---

18 oriketa：riketa だけでも「～を上に上げる」という意味で用いられる。反義語「～を下に下げる」は raeta。

19 kamuyasi：他方言では kamiasi, kameasi, kamnasi などさまざまな語形で現れる。「化け物」という意味だが、悪口としても使われる。

20 sino unukar=an：その前の sinot unukar「戯れの出会い」の unukar は明らかに名詞としての用法だが、sino は副詞「本当に」としても連体詞「本当の」としても使えるので、ここでは自動詞として unukar=an「私たちが出会う」とも、名詞として unukar an「出会いがある」とも解釈可能である。人称接辞の=an が自動詞 an「ある」と同起源である可能性が、こういうところに示される。

21 su tattatce ekannayukar：膿が出て泡が立ち、鍋が煮立ったようになっているという表現だが、化膿して傷が悪化しているということではなく、治りかけていることを示している。

22 kutatke：語義不詳だが、形の上では kutata「～をざーっとぶちまける」の自動詞形にあたる。そこから推測すると、cima「かさぶた」が傷口の上一面に広がることを指していると思われる。

a=pirihi tuk wa <wa>,	傷口も盛り上がって
teeta nanka teeta sirka a=kor ruwe ne korka,	昔の顔つき、昔の容貌を取り戻したが
inu=an ciki <ki>	聞くところによると
pon Iskar un kur ne wa,	（例の男は）小石狩人で
kim ta arpa wa	山に行って
orowaun a=petpapetpa wa hosipi wa,	私に切り裂かれて戻ったが
orowano ne usike munin w_a paye wa,	その場所が腐って行って
sak pa iwan pa mata iwan pa[23]	夏 6 年冬 6 年
kasi ehotke[24] yak a=ye hi	寝込むことになったという話を
a=nu kor an=an ruwe ne yakun	耳にしていた。ということは
"Iskar un kur ne hawe ne yakun,	「石狩人といえば
a=irwakihi ne hawe ne wa kusu	私の従兄弟だという話なので
rametokkor siri ne anan[25] ruwe ne."	それであのように勇者だったのだな」
sekor yaynu=an kor an=an ruwe ne korka,	と思いながら暮らしていたが
asinuma anakne tunas	私はさっさと
a=pirihi pirka ruwe ne korka <ka>,	傷が治ってしまったが
Iskar un kur anakne	石狩人は
sak pa iwan pa mata iwan pa	夏 6 年冬 6 年
pirihi kasi ehotke[26] wa an ruwe ne	傷が治らずに寝込んでいた
sekor hawas hawe a=nu kor an=an	という話を聞いていた
ruwe ene an h_i ne.	のである。
orowano suy nep ka a=kar ka	そしてまた、何も
somo ki no an=an y_akka	しないでいても
mismu=an pe ne kusu,	退屈なので
ekimne ... <ne>=an w_a,	山に行って

---

23 sak pa iwan pa mata iwan pa : mata pa iwan pa「冬の年 6 年」のように言う人もいるが、sak pa「夏の年」と音節数を合わせるために、pa を省いた言い方になっているのだろう。

24 kasi ehotke : このままだと「その上に横たわった」ということで、何の上に寝たのかがわからないが、後で pirihi kasi「傷の上」という表現が出てくる。

25 anan :「後から考えて～だったということがわかった」ということを表す助動詞。他方言では aan、awan のような形で出てくる。

26 pirihi kasi ehotke :「その傷の上に寝た」ということで、傷が治らないままの体で寝ていたということを表す。ちなみに、この表現は pirihi を省略した kasi ehotke の形だけで前出している。

yuk cikoykip kamuy cikoykip a=eawnarura.	シカやクマを捕ってきた。
orowa cepkoyki=an kus arpa=an kor	それから魚捕りに行くと
cep ne yakka i=hekota uekarpa	魚も私のところへ集まってくる
pekor iki pa kor arki p,	かのようにやってきて
apkas ka =an ka[27] somo ki no	歩き回りもしないで
a=yanke a a=yanke a wa	岸に上げ、岸に上げて
a=se wa hosipi=an w_a	背負って戻り
a=satke p ne kusu <su>	干したので
sinen a=ne wa e p ne kusu	ひとりで食べていたものなので
poronno a=satke wa	たくさん干して
a=kor wa an=an	蓄えていた
ruwe ene an h_i ne a kusu	のであったが
sineanpeta <ta>, aynu ...	ある日のこと、人…
cise soy un aynu ek hum as hine,	家の外に人の来た音がして
orowa omkeomke esnaesna[28] kor an	咳払いや、くしゃみをしている
hawe as wa kusu,	音がするので
apa a=caka hine inkar=an akusu	戸を開けて見ると
a=eramuskari p	見知らぬ者
a=nukar ka eramuskari p iki korka,	見たことのない者であるが
Otasut un menoko aarkotomka[29]	オタスッ媛に違いない者が
i=soyke ta ek hine <ne>,	外に来ていて
sihumnuyar kor sihawnuyar[30] kor an	咳払いをしたり、声を立てたりしている。
hawe ne anan wa kusu	音であったので、

---

27 apkas ka =an ka somo ki : このように apkas と人称接辞の=an を切り離した表現を行う背景として、白沢氏が apkas ka somo a=ki のように、形式動詞の ki のほうに人称をつける表現を行わないからではないかと思われる。沙流方言の話者には、この a=ki のような表現が見られる。

28 esnaesna : 人の家を訪れた時、咳払いをして家の人に来訪を知らせるというのはよく言われることであるが、くしゃみをするというのは他に聞かない。白沢氏のテキストでも、これ以外に例を記録していない。

29 aarkotomka : a=「人が」ar-「まったく」kotom「～のようである」-ka「～させる」

30 sihawnuyar : 他人の家を訪れた時、ehu eeee という声を出して中の人に知らせるというやり方があり、これを sihawnuyar「自分の声を聞かせる」というのではないかと思うのだが、白沢氏はそれを simusiska というのだと言う。

"ahup rusuy kus payekay kur anakne	「入りたくてやってきた者は
ahup y_ak pirka na."	入るがよかろう」
sekor itak=an hine,	と私は言って
orowa ahun=an w_a a=an w_a an=an akusu,	そして家の中に入って座っていると
ne katkemat reye kane sinu kane[31]	その女性は這ったりずったりしながら
ahun h_ine <ne> i=arsoke ta ahun w_a	入って私の向かいの席にやってきて
a ruwe ne hine,	座った。
nepenepo pirka katkemat ne wa	なんとまあ美しい女性で
siri anak a=eramuskari	見たこともない
pirka katkemat ne hine <ne>,	美女であり
nan ne kor pe hetuku cup ne inantasare <re>.	顔は上る太陽のように輝き
nan ne kor pe hetuku cup ne inantasare.	顔は上る太陽のように輝き
orowa tapkasike kimuy ka ta onottasare[32]	その上で、頭の上で交差して
mukke turenpe nociw kiru ne	隠形の憑き神が、星をひるがえしたように
episkanike tewnin kane	（頭の）回りで明滅している
sara turenpe kapap say kunne	顕形の憑き神はコウモリの群のように
piskanike kurun kane <ne>,	（頭の）回りに影を落としている
tusuno p sone nupurno p sone	巫術に優れ霊力のありそうな
katkemat ahun.	女性が入ってきた
（中断）	
ene hawean h_i ene an h_i	彼女はこのように言った。
"asinuma iki wa iki p[33]	「私は
yaykotanesina anakne a=eaykap kusu,	自分の村を隠すことはできませんので

31 reye kane sinu kane：家の中をきちんとした仕草で移動する時の常套句。reye は両手両膝を交互に出して移動すること。sinu は正座した状態で両手に重心をかけて、両膝をそろえたまま移動することである。立って歩くのは無作法とされる。

32 kimuy ka ta onottasare：何が交差しているのか、この文章ではわからないが、金成マツの yukar 中に、attap kasi sikus rayoci attap kasi ekay rayoci cieomare kimuy kasi ta unottasare「片肩の上に日光の虹が片肩の上には半輪の虹がそこにあって頭上の所で互いに交叉する」という表現があり、本来はそのような形だったのではないかと思われる。

33 iki wa iki p：通常は「例の者」というような意味で、文脈から誰のことかわかっている人物を指すのに使う指示代名詞的な句だが、別の yukar でも、Iskar un mat「石狩媛」が名乗りをあげる場面で、iki wa iki p yaykotanoresina=an ka a=eaykap kusu という表現を使っている場面が出てくる（N9306021.YR）。一種の常套的な表現となっていると思われる。

a=kor kotanu re kor katu Otasut ne wa,	私の村の名はオタスッで
Otasut un mat a=ne wa an=an	私はオタスッ媛で
ruwe ene an h_i ne awa,	ございますが
a=unuhu a=onaha	母や父は
ene haweoka h_i ene an h_i <ni>.	こう申しております。
'Sinutapka un kamuy ne an kur	『シヌタァカの神のようなお方が
a=e=koresu wa oka=an ruwe ne na.	お前のいいなずけであるのだ。
arpa wa <wa> paro osuke.	行って、食事のお世話をしなさい。
sinen ne an kur ne wa <wa>	ひとり者であり
ramu aeomaruy[34] ruwe ne kusu <su>	？なので
arpa wa paro e=osuke kus ne na.'	行って食事のお世話をしなさい』
sekor a=unuhu ka a=onaha ka haweokay kor	と、母も父も言っては
i=opauyruke[35] p ne kusu <su>,	せっつくので
tanto ek=an ruwe ne kusu,	今日、ここへ来たのですから
ikian anun ne a=i=nukar[36] na."	つれなくしないでくださいませ」
sekor kane hawean.	と言う。
orowano munnuwe kusu hoyupu.	そして、掃き掃除をして走り回り
itapiru kusu hoyupu.	拭き掃除をして走り回り
suke kusu cihoyupure.	食事を作るといって走り回る。
nepenepo nepki wa sirki ya ka a=eramuskari.	なんと働き者であることか。
nep ... osoro sirka ta anu siri ka isam no,	腰を下ろす様子もなく
nep ne yakka kar kusu cihoyupure kor ... wa	なにくれとなく立ち働き
i=parosuke wa ... i=parosuke wa	私に料理を作って
ita cikisma isam kane	持つところがないほど皿に盛って
i=koypuni wa kusu,	私に差し出すので、
neno hawean kor ek pe ne kusu <su>,	そんなことを言ってやってきたのだから
ita ... a=i=kopuni p	差し出されたものを

34 ramu aeomaruy：このように聞こえるが、意味不詳。

35 opauyruke：語義を確認していないのだが、o-「～に向かって」pa「口」uyruke「～を置く、～を設置する」ということから、「～にやかましく言う」ということと解釈した。

36 anun ne a=i=nukar：anun「他人」ne「として」a=i=nukar「人が私を見る」

isapke not ne etu not ne a=e[37] hine	一口半食べて
orowa a=koruttutu wa kusu	押しやると
koonkami hine e ruwe ene an h_i ne hine,	おしいただいて食べて
orowa ...	それから
orowano uesone=an[38] w_a	それから夫婦となって
oka=an ruwe ne korka,	くらしていたが
nepenepo yuptek wa	なんとまあ働き者で
sirki ya ka a=eramuskari.	あることか
usa an pe ninninu kor	色々なものを縫っては
rikun kakenca ranke kakenca koerewewse.	上の掛け竿、下の掛け竿をたわめ
u tu uturu[39] tu imeru kur kotuytuyke.	縫い目の間にふたつの光をよぎらせ
re imeru kur kotuytuyke kane	三つの光をよぎらせ
askay hene ki katkemat ne wa,	縫い物上手の女性でもあり
orowano toyta usi ek kor	畑へ来るというと
toyta a toyta a wa <wa>,	畑を耕し耕し
usa aepi poronno	色々な作物をたくさん
tu pu epuni re pu epuni kane <ne>	ふたつの倉、みっつの倉を建て
yanke ruwe ne wa	そこに上げて
orowano ekimne=an kor	私が山に行くと
tun a=ne kusu	ふたり暮らしだから
a=e kasma p ne korka <ka>,	食べ余してしまうのだが
a=an w_a an=an ka eaykap kusu,	座っているわけにもいかないので
orowano ekimne=an w_a	山へ行って
yuk cikoykip kamuy cikoykip a=eawnarura.	シカやクマを捕ってくる。
ramma koraci cepkoyki=an y_akka	いつものように魚捕りをしても

---

37 isapke not ne etu not ne：isapke は「味見する」not は「ひと口の大きさ」。(sine) not ne etu not ne で「ひと口半で」となる。よそられたものを男が少し食べ、残りをよそった女性に返して、それを女性が食べるという婚約の儀礼がある。その表現としては sonapi arke「高盛の半分」を差し出すというのがよく知られているが、ひと口半というのは珍しいかもしれない。

38 uesone：u-「互い」e-「～について」so 座」ne「～となる」＝「座を並べる」。並んで座ることから、夫と妻として暮すことを指す。

39 u tu uturu：これは韻文で発達した常套句なので、冒頭の u はおそらく全体を 5 音節にするために加えられた虚辞がそのまま固定したものと考えられる。

poronno i=etok ta cep okay pe ne kusu,	私の前に魚がたくさんいるので
pirka uske a=yanke a a=yanke a wa	いいやつを岸に上げて、上げて
a=se wa hosipi=an wa	背負って帰り
a=e kasma usi a=satsatu kor	食べ余したものは干して
oka=an ruwe ne ayne,	暮らしているうちに
menoko kamuy poro honkor hine <ne>	その女性は大きなお腹になり
kor wa a=nukar kusu <su>,	生まれた子を見ると
a=arkehe a=yasa apekor an[40]	私そっくりな
hekaci kor pe ne kusu	男の子が生まれたので
orano a=ukoomap kor	そこでふたりして可愛がり
a=ukoterkere[41] kor oka=an ruwe ne.	取り合いをして暮らしていた。
orowano menoko po ka okkayo po ka	それから女の子も男の子も
poronno kor kor oka=an ruwe ne wa,	たくさん生まれて
hoski rupne p	先に大きくなったものには
ene okkayo monrayke oka hi a=epakasnu.	男の仕事の仕方を私が教え、
rupne hike	大きくなったもの
rupne menoko a=macihi usa an pe,	成長した娘には妻が色々なこと
ene katkemat kar pe ne hi epakasnu pa wa,	女の仕事の仕方を教えて
nepenepo yuptek pa wa	子供たちもなんとまあ働き者か
sirki ya ka a=eramuskari.	わからないくらいである。
toyta usi ek kor unuhu kasuy wa	畑に来ると母親を手伝って
toyta rok toyta rok wa,	畑を耕し耕し
nep a=e rusuy nep a=kor_ rusuy ka	何を食べたいとも何を欲しいとも
somo ki no oka=an ruwe ne korka,	思わずに暮らしていたが
orowano anakne	それからは
Iskar un kur anakne	石狩人のことは
a=oyra wa a=hotanukar ka somo ki.	忘れて会いに行きもしなかった。

---

40 a=arkehe a=yasa apekor an：直訳すれば「私の半分を裂いたような」ということで、よく似ていることを表す常套句。

41 ukoterkere：u-「互い」ko-「～に向かって」terke「跳ねる」-re「～させる」。両親が子供をかわいがって、お互いに「こっちにおいで、こっちにおいで」と言うので、子供が父親のところにとんでいったり、母親のところにとんでいったりするという情景。

i=hotanukar ka somo ki.	たずねても来なかった。
"sonno unukar=an kus ne na"	「本当の出会いをするからな」
sekor hawean kor	と言いながら
uekohoppa=an pe ne a korka,	別れたのではあるが
ek siri ka isam.	来る様子もない。
arpa=an ka somo ki.	私も行きもしない。
ek siri ka isam pe ne kus	来る様子もないので
arpa=an ka somo ki no <no>,	私も行きもしないで
ne korka a=macihi yuptek wa	ではあるが、妻は働き者で
poronno toyta ka ki <ki>.	畑仕事もたくさんする。
Otasam[42] un sinewpa=an ka ki.	私たちもオタサムに遊びに行き
Otasam un utar i=kosinewpa ka ki.	オタサムの人たちも遊びに来る。
sakekor=an kor a=tak.	私たちが酒を作ると、向こうを招き
sakekor pa kor i=tak.	向こうが酒を作ると、招かれる。
sino uepirka pirka uepirka a=ki[43] kor	おたがいに栄え合いながら
oka=an ruwe ne ayne,	いるうちに
a=pohoutari tane rupne hine	息子たちももう大きくなり
orowano ekimne kor	山に行けば
ene ekimne=an epirka a hi	私が山に行って豊かになったのと
neno kane ekimne wa,	同じように、山へ行くと
kamuy ne yakka rupne kamuy se wa sap.	クマも大きなクマばかりを背負ってくる。
yuk ne yakka piye yuk se wa sap kane wa	シカも肥えたシカを背負って下りてきて
nep a=e rusuy ...	何を食べたいとも（思わない）。
i=kasuy pe ne kusu	私たちを手伝ってくれるので
nep a=e rusuy nep a=kor_ rusuy ka	何を食べたいとも何を欲しいとも
somo ki no <no>	思わずに
kamuy uepirka pirka uepirka=an[44] kor	お互いに大変豊かに暮らしつつ

---

42 Otasam：妻となった女性は Otasut の人のはずだが、ここでは Otasam と言っている。解説でも Otasut un mat だと言っているので、ここは単純な言い間違いだと思われる。

43 sino uepirka pirka uepirka a=ki：uepirka は u-「互い」e-「～で」pirka「よくなる」で、「お互いの力で共に豊かになる」という自動詞だが、ここでは、ki「～をする」の目的語として名詞扱いになっている。

oka=an ayne <ne>	いるうちに
tane anakne asinuma ka kemapase=an	今は私も年をとった
pe ne korka,	のだが
a=pohoutari poronno an pe ne kusu <su>	子供たちもたくさんできたので
nep a=e rusuy ka	何を食べたいとも
nep a=kor_ rusuy ka somo ki no,	何を欲しいとも思わず
tapne kane an pe	これこれこのように
kim ta kamuy or wa kese a=anpa kur	山でクマに追われていた人を
a=siknure rusuy kusu	助けたいと思って
i=kesanpa wa ek wen kamuy	追ってきた悪いクマ
cicikewna[45] sekor a=ye wen kamuy	チチケウナと呼ばれる悪グマ
kamuy akkari wen pe ne wa	クマよりも悪いもので
siran pe ne a p	あるのだが
koysum tak ekupa kane wa	口から泡を吹きながら
orowano Iskar un kur ne anan pe	そして、石狩人であった
a=irwakihi ne anan pe	私の従兄弟だった人物が
kese a=anpa wa ek wa,	追われてきて
kasi a=opiwki kusu a=kik wa a=rayke hi	それを救うためになぐり殺したのを
i=koruska[46] kusu	腹を立てて
orano i=kosakayokar wa	文句をつけ
i=kotametaye wa ukoyki=an.	私に刃を向けて、戦いになった。
ukoyki yupke p a=ki ruwe ne a korka <ka>	激しい戦いを繰り広げたのだが
hosipi wa orano	家に戻って

44 kamuy uepirka pirka uepirka=an : kamuy uepirka「神のような（すばらしい）共栄」、pirka uepirka「立派な共栄」という表現においては、uepirka は名詞として扱われているようにみえるが、uepirka=an は自動詞としての形である。

45 cicikewna :「cicikewna って、クマみたいなもんだけど、クマよりきかないもの。小さいものの悪いものあるんだと」(N8808292.FN)、「この cicikewna っていうのは、毛が縮れているからわかるもんだって。わしのおとうさんがゆったの聞いたことある」(N8808292.FN)、「cicikewna っていうもの、クマに似たものだっていうんだ。だけども、頭の格好も違う。ほして、毛悪いもんだと。cipor pe a=ota apekor an, cikuy pas a=kuste apekor an＜スジコの汁をかけたような、噛み砕いた炭をまぶしたような＞ それが cicikewna っていうもの」(N9103071.FN)

46 koruska :「～に対して～のことを怒る」を表す３項動詞。ko-「～に向かって」の目的語は i=「私」であり、ruska「～を怒る」の目的語は、rayke hi「殺したこと」

sak pa iwan pa mata iwan pa	夏6年冬6年
kasi ehotke wa an yak a=ye hi a=nu kor	それで寝こんだという話を聞きながら
asinuma anakne	私は
a=piri kesehe a=piri pakehe	傷の上端、下端が
su tattatce ekannayukar korka	鍋が沸き立つようになったが
a=piri ... a=pirihi a=yaykokarkar ayne <ne>	傷を自分で癒して
itto terke ta pirka hine an nispa	日ごとによくなった。
a=ne ruwe ne a katu	私がそういう人物であることを
a=pohoutari a=epaskuma kor	子供たちに言い聞かせながら
kim ta eci=ekimne wa	お前たちは山に狩に行って
nep ka eci=oyamokte yakka	何か不審なことがあっても
iteki kasi eci=opiwki kusu ne na	決して助けに行くのではないよ
sekor an pe	ということを
a=pohoutari a=epakasnu.	子供たちに教えた。
tane anakne a=osikoni wa	今にも追いつかれて
cicikewna or wa a=e wa isam kur	チチケウナに食べられてしまい
ne apekor a=ramu wa kusu	そうに思ったので
kasi a=opiwki kusu iki=an h_i ne a korka <ka>	助けるためにしたことであるが
i=kotametaye wa orowano	刃を向けられて
"ne kotan kor pe	どこの村の者
ne mosir kor pe e=ne wa	どこの国のものが
i=pakno rametok e=kor wa he e=iki ya?	私ほどの度胸を持ってしたことか？
a=sinkiekote kusu	疲れ死にさせるために
a=sikesanpare."	追いかけさせていたのに」
sekor hawean kor	と言いながら
i=kotametaye wa orowa *naanipakne ...	私に向かって刀を抜いて
naanipakno[47] i=yaykorayke	もう少しで死ぬはめになる
naanipakno a=yaykorayke p	もう少しで死ぬはめになるところ
ne ruwe ne kusu	だったので

[47] naanipakno：「今にも～しそうだ」「もう少しで～するところだった」を表す副詞。naani、naanipakpe も同義。

eci=ekimne wa kim ta	お前たち、狩に行って山で
nep ka eci=oyamokte yakka	何か不審なことがあっても
ikian etarka kasi eci=opiwki kuni	むやみに助けに行こうと
eci=ramu yakka wen ruwe ne kusu	思ってはいけないので
iteki <ki> mosma no eci=oka wa	ほっておいて
eci=inkar wa eci=oka yak pirka na	見ているのだよ。
sekor a=pohoutari a=paskuma kor ...	と、子供たちに教えながら
a=paskuma kor onne nispa	教えながら年老いた長者で
a=ne ruwe ne a kusu	私はあるので
a=eysoytak hawe ne na.	その物語をするのだ。
sekor kane nispa hawean kor onne.	と、長者が言いながら往生した。

（なかがわ　ひろし・千葉大学人文社会科学研究科）

Ainu Folklore Text-8
Nabe SHIRASAWA's *yukar irupaye*,
"The man of Sinutapka battled with the man of Iskar "

NAKAGAWA Hiroshi

Summary:

This text was recited by Nabe Shirasawa (1905-93) on Aug 29, 1988, who was born in Chitose. The Ainu heroic epics are usually known as verses sung on melodies. In Chitose (and several other areas), however, women can't sing them but must recite them in prose. Whether there are differences in stories between the epics in verse and in prose has never studied but this text would be one of the examples which suggests the existence of some differences.

Outline of text:

I am a man of Sinutapka. One day when I was hunting in the mountain, I saw a man who was chased by a monster bear. I killed the bear with a club to save the man, but he got mad at me, saying he had had chased himself by the bear deliberately to kill it. He proposed me to battle with him. We battled with sword for a long time and ended up seriously wounded each other. The man went back home saying that it was a false encounter and that the next time would be a true encounter. Back home my wounds soon healed up. Then I heard that the man was the man of Iskar, my cousin. He kept suffering from the wounds for six years.

One day a beautiful girl came to my home. I knew she was a woman of Otasut, my fiancée. We got married and got many children. They grew up and became good at hunting or housekeeping. When we got old, they fostered us in reverse. Thus we lived well off and peacefully. The man of Iskar said that the next time would be a true encounter, but he never came to my home and vice versa. I told my children the tale I had experienced and told them never to help someone under suspicious circumstances in the mountain.